石井勲の漢字教室

4　親こそ最良の教師



II 対談・幼児と漢字をめぐって

付・ドーマン博士の幼児教育

質問者 柳平 彬

グレン・ドーマン将士は、幼児教育について、三十年余の経験と実績を持った方です。そのドーマン博士をここにお招きし、いろいろとお話をうかがう機会に恵まれたことは、感謝に耐えません。先生は、これまで脳障害児の治療に当たり従来不可能と考えられていた脳障害児の回復に貴重な実績をあげておられます。一九〇九年、米国ペンシルバニア州に生まれる。一九四〇年、ペンシルバニア大学物理療法科を卒業。その後、テンプル大学病院、ペンシルバニア病院に勤務し、一九四五年には、ノーヒット・リハビリテーション・センターの理事。一九六五年フィラデルフィア人間能力開発研究所を創設し会長に就任。プレイトン大学から名誉博士号を受け、現在、人間能力開発研究所の所長として、世界各国で脳障害児の治療に当たり、優れた成果をおさめている。

現在の仕事

柳平：まず最初に、フィラデルフィア人間能力開発協会は、現在、どのような仕事をしていらっし

やるのか、お聞きしたいと思います。

ドーマン：この協会は、二十年前に、非常に重い脳障害の子供たちに治療を加えるためにつくられました。目も見えない耳も聞こえないというような子供たちのためです。私が、この事業を始めました時は、脳障害児の治療が目的でした。幼児の才能をどう伸ばすかということについて、日本で、お話することなどは、少しも考えていませんでした。

しかし、何事についても、真の研究者、良心のある研究者というのは、その研究がもたらす全ての道へと踏み分けていかなければなりません。たとえ、それが、最初の目的からズレだものであっても……。

脳障害児を治療しているうちに、私は、何人かの障害児は、普通の子供と同じように行動することに気づきました。ある部門では、普通の子供より優れた能力を発揮することを発見しました。ある脳障害児たちは、普通の子供達より早い時期に読めるようになるのです。これは、いったい、どういうことだろうと考えました。これには、二つの答があったかと思います。一つは、脳障害があるということは、良いことではない、マイナスである。従って、当然、そんなハズはない。二つは、普通の子供たちの方に、何か足りないところがあるのではないか、という疑問です。この事実から、私は、単に脳障害児の治療だけではなく、全人類の知能の向上に貢献しようと思い始めたのです。

トミー坊や

柳平：脳障害児が、正常な子供以上に育っていく経過についてうかがいたいと思います。ここに、『ドーマン博士の幼児開発法』（グレン・ドーマン著）という本がありますが、この中に、トミー坊やの話が出てきます。私は、この話に大変感銘を受けました。脳障害児トミー坊やの実例に沿って、お願いします。

ドーマン：この本のトミーの例は、大変面白いものです。トミーは中流以下の家庭に生まれ、父親は、小学校二年までしか教育を受けていません。母親は、中学を卒業した程度。トミーは出産の時に困難があって、帝王切開をして生まれました。トミーの両親は、貧しく、教育もありませんでしたが、トミーのことは、非常に愛していました。

トミーを最初に診断した脳外科の医者は、トミーの脳損傷は非常に大きいから、トミーは終生、施設に入らなければならないという診断を下しました。トミーの両親は、この解答に満足できませんでした。何か他の方法はないかと、二年半、探し歩いたのです。もしも、魔法使いの医者がいて、「トミーは直りますよ」と

言ったなら、トミーの両親は、必ず、そこへ出掛けたことでしょう。ですが、魔法使いの代わりに、トミーの両親は私のところへ参りました。

トミーが最初に来たときは、三歳になったばかりで、全身が麻痺していました。もちろん、言葉は話せず、人間というより植物に近い状態でした。私は、トミーのためにプログラムを作って、両親に「一日十時間こうしてやりなさい。一週間休みなく続けるのですよ」といいました。トミーの両親は、とりつかれたように実行しました。

トミーが、三回目の診察に来たときは、手で、はい回ることができました。トミーの両親は、非常に力を得、これから、何でもしようという気構えでした。トミーが三歳半になった時、パパ、ママと言うことができました。それから、母親はトミーに本を買って与えたのです！　これはちょうど、若い父親が、赤ん坊の息子に野球のバットを与えるようなものでした。

次の診察の時、父親は「トミーは絵本の中のアルファベットは全部読めるんですよ」と言いました。私は、何の感情も表わさないで、「それは結構ですね。でも、私は、トミーが、もっとハイハイをするのが見たいのです」と答えました。

その次の診察の時、父親は、「トミーは、もう五冊も本が読めるんですよ」と言いました。その時も、私は、何の注意も払わないで、前回と同じことをくり返しました。

その次に来た時は、父親は、「トミーは、もう何でも読めるんですよ」といい、私は同じ返事をしました。父親は、もう我慢できません。そのうち、昼食が運ばれてきて、ハンバーガーとトマト・ジュースが、私の前に置かれました。父親は、怒っていましたので、「ドーマン先生は、ハンバーガーとトマト・ジュースがお好きです」と紙切れに書いて、トミーに読みなさいと言いました。トミーは、それをスラスラと読んだのです！　正直なところ、私は自分の耳が信じられませんでした。父親が、次から次へと、いろいろなことを書いていくと、トミーは、片端から読んでいきます。

私は、全く仰天しまして、父親に「なぜ、もっと早く教えてくれなかったんですか」と言いました。すると、父親は答えました。「私は、毎回言っているのに、あなたが聞かないだけです」。それは、全くその通りです。私は、早速、私のところで働いている人びとを、みんな呼んで、このことを説明しました。一生懸命に説明している間、トミーは、うしろの椅子で、「リーダーズ・ダイジェスト」に読みふけっていました。

トミーは、今、たしか十二歳から十四歳の間だと思います。私が最後に会ったのは二年前です。トミーは、

アメリカで聞かれた大きな会議で演説したのです。米国の副大統領の演説のすぐあとで、四千人の聴衆に向かって演説しました。壇上には、マイクロフォンが立ち並び、ライトがこうこうと光っていました。そこで、トミーは、立派にやりとげ、トミーは非常に重い脳障害があったということが説明されました。通常の子供でも、十歳やそこいらで、四千人の聴衆を前にして演説のできる子供は少ないでしょう。

幼児も読める

柳平： 幼い子供に文字を教えるなんてとんでもない、という人もいますが、幼児は、本当に読むことができるのでしょうか。もし、できるとしたら、なぜ、それができるのでしょうか。

ドーマン： これは、たいへん重要で、たいへんおもしろい質問です。幼児は文字を読むことができるか、できないかということは議論ではなく、事実です。

なぜ、幼児は読むことができるか？　これは、非常に重要な問題です。

なぜ、子供は読解で今るか、それは、子供が、すべて皆、語学の大才であるからです。自分たちは、子供より何事においても優れている、と大人は主張し続けています。そして、子供は、大人より劣った大人の雛型だというように、子供を見なしがちです。子供は大人のように背は高くない。それは事実です。私のように太ってはいない。確かにそうです。

子供は大人に劣るか

そのため私たちは、子供は大人ほど頭も良くない、と決めています。けれども、これは全く事実に反するわけです。

私が、まだ、青年の頃、フランス語を習得しようと六年間も努力 したことがあります。その結果はどうでしょうか。フランスの料理屋へいって「水を一杯ください」と言うことさえうまくはできません。

一言の日本語も言えなくて、お恥ずかしいのですが、私の前にいらっしゃる若いきれいなお母様方は、日本語を無理なくお話になっています。

今晩、東京で生まれる赤ちゃんにとって、日本語は、外国語であるかもしれません。英語であっても、フランス訥であっても、また、スペイン語であっても生まれてくる赤ちゃんにとっては同じであります。

しかし、三年たって、赤ちゃんが三歳になると、もう日本語を覚えています。特別に先生がいたわけでも

ありません。

幼児は語学の天才

これは、どういうことかと申しますと、つまり、幼児というのは語学の天才である、ということなのです。皆様も、これは、もうよく御存知のことなのです。

もし、二か国語を話している家庭に赤ちゃんが生まれれば、赤ちゃんは、普通に二か国語を話すようになります。

ブラジルで、私は、小さい小さい坊やに会いました。私がひねりつぶせば、ひねりつぶせるような小さい坊やが、九か国語をスラスラと話していました。

その坊やは私に「ドーマン先生、私の英語は、学校で習ったものですからあまり上手でなくて相すみません」といったのです。それをイギリスのオックスフォードの訛でスラスラといったのです。私は北フィラデルフィア地方の訛がありますので、全く、面子がつぶれてしまいました。

どうして、こういうことが可能なのでしょうか。それは、すべて脳の中に起こる奇跡ということができます。人間の脳の中では、こういう特定なことが、起こるのですが、それでは、どういう特定のことが、人間の頭脳の中で起こるのでしょうか。

赤ちゃんは自分で習う

アメリカでは、子供たちには英語を教えるのだと私達自身、信じ込んでいます。しかし、これは本当のことではありません。本当のところ、私達が子供に教えるのは〝ママ〟〝パパ〟、それと〝イヤ〟という三語だけです。あとの百万語、または、それ以上の言葉については、子供たちが自分で習うのです。

私たちは、赤ちゃんに向かって「これは、眼鏡だよ」ということは決してありません。私たちがいうのは、「眼鏡を持ってきて」とか「私の眼鏡の上にすわっちゃいやよ」とか「そこの眼鏡をとって」などという言葉です。

普通の赤ちゃんは、このようにして、眼鏡とはどんなものかを習っていくのです。

子供にとって、グラス（眼鏡）という〝音声〟と眼鏡という〝もの〟とは、あまり関係がありません。なぜなら、日本語では「眼鏡」、英語では「グラス」といいます。同じものでも音声が全く違うわけです。これ

は、英語では「グラス」といえば眼鏡のことを指すという、ただ、ちょっとした約束なのです。

眼鏡というのはどういうものかを、子供に教えるときを考えてみましょう。最初、「眼鏡」という言葉が子供の耳に入ります。耳は、聞くことだけです。耳は、ただ、肉の固まりでしかありません。それを理解することはできません。耳から入った言葉が神経を通じて脳に通じます。これが重要なところです。耳の中で、「眼鏡」という言葉が科学的な刺激となって、それが、耳を伝わって、頭脳に入っていくわけです。頭脳は、それを理解します。けれども、頭脳に聴覚というものはありません。

つまり頭脳が聞いているわけではありません。頭脳そのものは全く闇の世界なのです。頭脳は、音を聞きません。しかし、科学的な刺激を受けることによって、自然に眼鏡という観念を理解するのです。

大きく、はっきり、何回も

ですから、赤ちゃんが新しい言葉を理解するには、次の三つのことが重要です。

一、刺激は、大きなものであること。二、刺激は、はっきりしていること。三、刺激は、何回もくり返されること。

私たちが、一歳の赤ちゃんに、話しかけるときは、大きく、はっきりと、何回も同じことを言っています。それは、教えられることではなく、本能的に、そうしているわけです。一歳の赤ちゃんに、「パパにボールを渡しなさい」と普通の声でいってもわかりません。まず、聞こえないでしょう。赤ちゃんのそうした器官が、まだ、未発達だからです。

ですから、最初は刺激を大きく与えて、赤ちゃんの聴・視覚が発達するにつれて、大人の声も小さくしていくのです。こうして、だんだんと、どういうふうにして話すか、ということを赤ちゃんは覚えていくのです。この質問に長い時間がかかりますが、大へん重要な質問ですので詳しく御説明いたします。

幼児はどうやって読むか

漢字は観念を表わす文字です。英語は、違います。英語の言葉の意味は、私たちが与えているものです。GLASSESを、「グラス」と読むのは、私たちがそう読むと決めたからです。例えば、眼鏡は「グッグ」といい、「グッグ」とは×××という印で去わすものである、と皆が決めれば、眼鏡は、「グラス」ではなく「グッグ」だと言うでしょう。

そうしますと、次に、視覚的にはこれを、どのように理解するか、ということです。最初、このメッセージは目から入ります。目は、見ることはできますが、理解することはできません。耳のときと同様、目は刺激が頭脳へ通じる一つの器官にすぎません。目の構造の中で、それが眼鏡という観念につながる作業が行なわれます。そして、頭脳へ刺激として送られます。頭脳は、盲の世界です。頭脳は、決して見ることはできません。しかし、刺激によって、眼鏡という〝観念〟を理解するわけです。

幼児は観念を理解する

赤ちゃんが眼鏡という観念を頭脳で理解するということが、お分かりになったでしょう。そうすれば、赤ちゃんにとって、読むということは、簡単であることもお分かりになるはずです。赤ちゃんは、日常、自発的に言葉を聞いています。言葉が理解できているのに、読めないはずがありません。頭脳にとって、同じ刺激なのです。

赤ちゃんが、眼鏡という文字を観念として理解するまでには、次の三つのことに気を付けなければなりません。

(1) イメージ・シンボルは、大きいものであること。(2) イメージ・シンボルは、はっきりしていること。
(3) イメージ・シンボルは、何回もくり返されること。

しかし、私たちは、いままで、このことに失政してきました。本に書かれているような小さな文字は、赤ちゃんの未発達の器官では良く見えないのです。そのため、大昔から、子供にとって、文字は秘密のようなものでした。

コマーシャルを読む

けれども、現在では、テレビがあります。コマーシャルには、コカコーラ、コカコーラと何回も出てきます。子供は、今までの観念をすっかり変えてしまいました。町にでれば、「あれは、コカコーラだ」「あれは、ソニーだ」と読みます。アメリカの子供でさえ、日本語を読むことができます。

コマーシャルは、大きくはっきりと書いてあります。そして、何回も何回もくり返されます。子供は、どんなに複雑な字でもスラスラと読みます。どんなに音声が難しくても、簡単なものと同じように、理解できるのです。



あなたはできる

柳平： 最近、ドーマン先生は、母親のモチベーションということを、非常に重要視されていらっしゃいます。モチベーションとは、簡単に述べますと、人間の持っている潜在能力を、その人が十分に発揮できるように働きかけることです。先生のモチベーションとは、一体、何であるかお話して頂きたいと思います。

ドーマン： 子供のモチベーションについてお話するとき、最初に思い浮かぶのは、お母さまのことです。私は、お母様方は、皆最上のお母様になれるという信念を持っています。私がお母様方に、モチベーションについてお話するときは、まず、「できる」ということについてお話します。「これも、おできになる」「これも、おできになる」とお母様に言えば、お母様の潜在意識の中にある事柄が引き出されるわけです。お母さまは、本当は、そのことを、ご存知なのです。反対に、「これは、できませんよ」「これは、できませんよ」と言えばそれは何にもならないわけです。

得意と不得意

私は変り者で、自分の不得意なことはなるべくしないでおこうと思っています。今までも、ずうっと、そうしてきました。幾つか私が得意で良くできるものがあります。得意なものは、上手にすることができます。誰でも、会うと上手だと言ってくれます。そうすると、私は、当然、「ええ、私は良くできましたよ。もう一回やってみましょうか」と言います。私は、自分が得意で良くできることを、何回も何回もくり返す傾向があります。

一方、不得意なことは、したくないという傾向があります。こういうふうに言ってみれば、私は、それ程、変り者ではないかもしれません。皆様方だって、得意なことは、何回も何回もくり返し、不得意なことはで

きるだけしないでおこう、という傾向はあるのではないでしょうか。

成功はお母さんの手中に

ここで、子供をどういうようにして、動機づけさせるか、ということについてお話してみたいと思います。

重い脳障害児の場合は、自分のやろうとしたことを、すべて失敗してしまいます。重い障害児の女の子を持つ母親に「お母さん、あなたのお嬢さんが、鉄棒にぶら下がるということは、とっても大切なことです。何回も何回も練習して、いつかは、このお嬢さんも、一分間、鉄棒にぶら下がらなければいけませんよ」と言いました。お母さんは、私の話を聞いて、メリーちゃんという重い脳障害の女の子を、家に連れて帰り、「メリーちゃん、鉄棒からぶら下がることは、あなたにとって、非常に大切なことなのよ」と言いました。

ここで、ちょっと、おうかがいしておきたいのですが、この重い脳障害の小さい子供が、どのくらい鉄棒からぶら下がれるとお思いでしょうか。はっきり言って、誰も知らないわけです。私も知りません。当のメリーちゃんにさえ分かりません。メリーちゃんが、成功したか不成功だったかは、お母さんの心構えの中にあるだけなのです。

九千回目の失敗

かりに、お母さんが「さあ、メリーちゃんやるんですよ」と言ってメリーちゃんを鉄棒にかけさせたとします。そして、メリーちゃんが、かりに二分の一秒ぶら下がったとします。

ここで、二つの可能性があります。一つは、「メリーちゃん、だめじゃない。そんなことじゃ。二分の一秒なんて。一分はぶら下がらなければいけないのよ」と言ったとします。すると、メリーちゃんは、心の中で、〝筋書き通りだわ。いつも私はこの通りなんだから。また、九千回目のしくじりをやっちゃったわ〟と思います。〝先生でもなんでも、大人は、皆こういうことをさせて、毎日毎日、失敗させるんだわ〟と思うわけです。

褒めること

また、もう一つの可能性もあるわけです。こんどは逆に、お母さんが「まあ、二分の一秒もぶら下がれたのメリー。こんな小さな、そして、体の麻痺している女の子が二分の一秒もぶら下がれると誰が思うでしょう」というようにも言えるわけです。「この病院の中では、あなたが一番偉い女の子よ。アメリカ中だって、

一番偉いかもしれない。世界中だって、一番偉いかもしれない」と言うのです。

そうしたら、メリーは、〝これは成功だったんだわ、それじゃもう一回やってあげようか〟と思います。

私の申しあげることは、非常に単純なことです。彼女が成功したということを褒めてあげて、失敗したことをけなさないのです。褒めてあげなければ、メリーちゃんは、必ず、もう一回鉄棒にぶらさがろうとします。根気よくそれを続けていけば、メリーちゃんは、とても長い間、チャンピオンになれるくらい鉄棒にぶら下がっていることができるかもしれません。

たくさんのオリンピックの選手の中には、かっては体の麻痺していた人が大へん多いのです。私が強調して言いたいことは、そういう人たちの両親は、きっと、一生懸命、彼らの努力を褒めていた方がただろうと思います。

教育ママと圧力

柳平： いま、日本では〝教育ママ〟ということが言われています。子供に無理に教育をするという傾向があります。しかし、一方では、幼児にあまり早く言葉を教えては、かえって、人間性に何か悪い影響があるのではないかとも言われています。これについて、おうかがいしたいのですが。

ドーマン： アメリカでは、教育ママのことを〝圧力〟と言っています。子供に圧力をかけるという意味です。教育されるということは、しばしば、苦痛を伴いますが、習うということは、最上の喜びでもあります。すべての子供は食べることよりも習うことの方が好きだと思います。「習いなさい」「習いなさい」と言って圧力をかけるよりも、子供が自分で習いたいと思っていることを妨げることのほうが、ずっと馬鹿げていると言えます。

赤ちゃんは、とくにそうです。習うことのほかに好きなことというのは、世の中にないと思います。子供は、習うことが好きなのです。けれども、結果を試されるのは嫌いです。皆様だって習うことはお好きでしょう。でも、それを試されるのは、いやでしょう。

「いま、私が申しあげたことについて、試験をしましょう」と言ったら、皆様は、ここで緊張されるに違いありません。子供にものを習わせるということで、圧力を加えるくらいバカバカしいことはないわけです。圧力を加えるということが、本当に子供に害を加えているのだと考えていらっしゃらないからです。

私の事務所に、お母さんが、赤ちゃんを連れて入ってきます。帰るとき、お母さんは赤ちゃんに「〝さよ

うなら〃とおっしゃい」と言います。でも、赤ちゃんは私に〃さようなら〃と言った例がありません。お母さんは、さらに、「先生に〃さようなら〃とおっしゃい」と言います。それでも、赤ちゃんは、何も言いません。

今度は、お母さんの方が、緊張してしまうわけです。私の方も、これで緊張してしまいます。だけど、赤ちゃんは、一向にそんなことは、意に介しません。赤ちゃんの注意は、全く他の方へ向いているのです。お母さんは、冷汗をかきますが、赤ちゃんは、そんなことに全く構いません。

というわけで、私は、圧力をかけるということは、好きではありません。また、これで効果のあったためしもありません。

文字の読めない子

柳平： あまりに早く無理をして子供に漢字を教え込むと、その子供のパーソナリティ、いわゆる人間性に影響があると言われていますが、これについてどのようにお考えでしょうか。

ドーマン： 私の意見としては子供の性格というものは、将来においても改善されると思います。アメリカでは、学校にいっている子供の二十五％が、字の読めない子供です。学校にいっていてさえ、二十五％も読めない子供がいるのです。



こういう子供は、たいへん困難な問題を抱えています。

もし私がどこの学校へいっても、「先生、あなたの生徒の中で、いちばん出来の良い生徒五人をここへ立たせて下さい」と言ったとします。そうすると、太郎さん、花子さんが、こちらへ出てきます。

今度は、「それでは、一番できの悪い生徒を、五人あっちの隅へ立たせて下さい」と言います。すると、先生は「じゃ、二郎さん、あっちの隅へいらっしゃい」と言います。

そうしますと、私は、こちらの隅にいるできの良い子供は、一番良く読める生徒たちで、あちらの隅にいる劣等生というのは、

字の読めない子供であると、言い切ることができます。この場合九十九%、私は、正しいと思います。

アメリカでは、知識がないために困っている子供が、たくさんいます。あまり物を知り過ぎているために、困っているという子供に会った例がありません。

私が申しあげたいのは、日本の子供に漢字を教えるだけでなく、アメリカの子供にも、漢字を教えてあげたいと思うことです。私が、こんなに精神薄弱な大人でなければ、ほんとうにそれを始めます。

ドーマン博士の思い出

柳平：それでは、ドーマン先生のいままで研究なさってこられた過程で、最も大変だったこと、それから、最も楽しかったことについて、お話をお願いしたいのですが。

ドーマン：最初に悪いことの方からお話しましょう。私の人生最悪のことというのは、何回も何回も起こります。それは、専門家たちに、子供は何でもできるんだということを教えることです。

私の人生最上の経験というのも、また何回も何回もあります。それは、お母様方に、お子さんは何だってできるんですよ、と申しあげるときです。お母様方は、すべて皆子供は何でも習うことができる、ということをご存知なのです。

私の自宅に、三冊の本があります。それは全世界のお母様方からいただいたお手紙です。それには、お母様方が小さなお子さんに読むことを教えたとき、何か起こったか、ということが書いてあります。

ときどき、世の中がいやになってしまったり、気が滅入ってしまったり、心配ごとがあるとき、私は事務所に入り、鍵をかけて、そういうお母様方からの手紙を取り出して読みます。そうすると、私は元気を回復します。

子供の改良と進歩のために

柳平：いま、日本では石井先生が所長となられて、幼児モチベーション・センターという組織をつくっておられます。そこでは、漢字教育専門のインストラクターの養成を目的とし、今年の三月に第一期生を送り出しました。いま、ここにいらっしゃるような熱心なお母様方もそこで一定期間の講習を受けることによって、漢字の教育者になっていただくことができるわけです。そこで、アメリカでも、脳障害児だけでなく、普通の子供に、言葉や文字を教えていくため何か組織的な動きがありますか。

ドーマン： 私が、世界で見たこのような教育に関する施設は、まず東京で石井先生たちの主宰していらっしゃるものです。

その次が、私の主催するフィラデルフィアの人間能力開発協会だと思います。フィラデルフィアの施設は、まだ石井先生の施設ほど進歩開発されておりません。

私は、子供たちの改良・進歩のためには、どのような施設でも、支持いたします。私たちの世代は、世界に存在するいろいろな問題を、まだ解決し尽してはいません。問題が、解決されなければならないとすれば、我々の子供たちを、我々よりもっと良いものにしなければなりません。それは可能だと思います。

石井先生と共同研究

柳平： 石井先生とドーマン先生が、共同研究をなさるということをお聞きいたしました。私たちは、そのことにたいへん期待を寄せております。それについて、現在どのようなお考えをお持ちでしょうか。また、どのようなことにご苦心をなさっていらっしゃいますか。

ドーマン： 私は、石井光生と協力して企画を立てるということを、非常に喜ばしく思っております。石井先生のなさっていることと、フィラデルフィアで私のしていることとは、同じことだと思います。それは、子供たちに一つのチャンスを与えることです。

私と石井先生が、共同で開発する資料を、より良く使うことによって、子供たちが彼らの可能性を、より発展させるチャンスを与えることです。私は、それを大へん期待しております。

お母さんは陶芸家

柳平： だんだん、終わりに近づいてまいりました。ここで、ドーマン先生の将来について先生の最終的な教育方針、さらに、先生が日本のお母様方に是非知っておいて頂きたい、ということについてお話願いたいと思います。

また、今迄の質問になかった点で、ぜひこの点を、ということがございましたら、それをお聞かせ頂きたいと思います。

ドーマン： 最初に申しあげたいことは、もう一回日本へ戻ってくることを、非常に期待しているということです。

次に私は、お母様方だけでなく、将来お母様となられるここにいらっしゃるきれいなお嬢様方にとっても、大変重要なメッセージをお伝えしたいと思います。

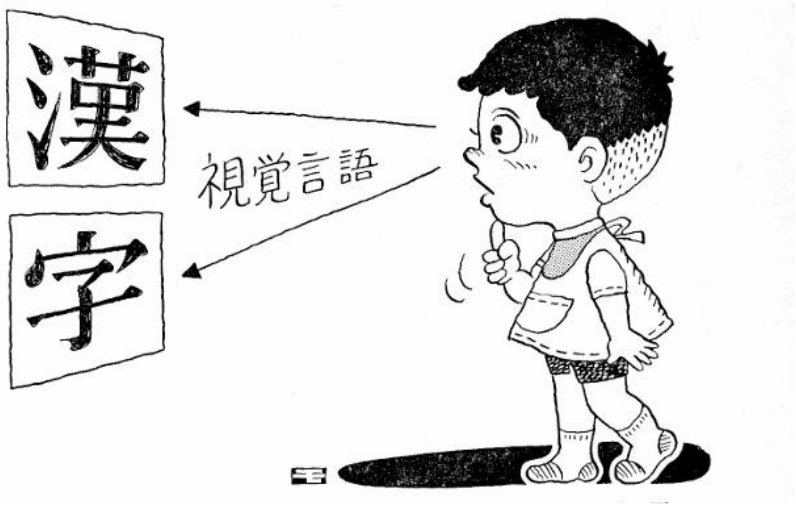
世界で一番大切なものは、ダイヤでもなければ、プラチナでもありません。それは赤ちゃんの頭脳を形成している三ボンドの物体なのです。

私は、あなたの趣味が良い趣味であるとか、悪い趣味であるとか、また、それは良い性質のものであるか、悪い性質のものであるかなどということを、あえて申しあげることはできません。ただ、ここで申しあげなければならないのは、お母様方が、これこそ最上のものだと信じていらっしゃるものが、悪いものと全く同じように、赤ちゃんの頭脳の中には、吸収されてしまう、ということです。

子供さんは粘土であり、お母様は、その粘土を壷につくる陶芸家です。その粘土は、どういうようにつくられるかということに、尊敬と誇りをお持ちください。

視覚による言葉の教育

参会者H：ドーマン先生は、脳障害児を六千名から七千名も治療なさったと、お聞きしましたが、それは、さきほどの〝大きく、はっきり、くり返す〟という三つのことを基本にされただけでしょうか。それとも、何かほかになさったことが、おありなのでしょうか。



ドーマン：私たちは、大きく、はっきりとした言葉から始めました。文字ではなく、大きく、はっきりとした言葉から教えたのです。

そして、このこと自体が、視覚というものを開発させるモチベーションになったわけです。それから、文字を与えて、子供の頭脳が発達するにつれて、文字を小さく縮め、普通の大きさになるまでそれを続けたわけです。

けれども、今これから申し上げるようなやり方もあります。それは、文字による方法です。最初、子供の器官を表わした言葉を、文字で与えました。口・耳・頭・手などです。こういう

言葉に、子供は一番初めに興味を示しました。

それから次に、お父さん、お母さん、お兄さん、お姉さんという順序で進めます。

こんどは、子供の住んでいる部屋の中のもの、部屋をとりまくものに、その名前を書いたカードを貼りつけます。天井・椅子・机などに貼りつけます。その中で、子供は暮らすわけです。足をそこに乗せてはいけませんよ、といわれたとき、椅子という文字を書いたカードがそれに貼ってあります。子供は、それでだんだんと椅子という文字を理解できるようになっていきます。

耳で聞いて言葉を覚えていくのと同じように、視覚によって言葉を覚えることができるのです。

（「モチベーション三十二～三十五号）